

I 目的

特別支援学校における主体的・対話的で深い学びに関する課題を明らかにし、課題解決に向けた実践を行い、実践事例を県内特別支援学校に共有化する。

II 課題(1年目のアンケート結果から)

県内特別支援学校(16校)の管理職及び各学部主事を対象にアンケートを実施し、以下のことが課題として挙げられた。

- ①「深い学びの実現」・・・「できていない」「あまりできていない」という回答が60%
- ②「教科別の指導実践の充実」・・・「授業実践の様子」では、教科別の指導は、30事例中7事例(生活単元学習は15事例)
- ③「重度の児童生徒の対話的な学びの実現」・・・病弱・肢体不自由学校において、「多様な手段で伝える」ことを課題に挙げる回答

III 実践(協力校のステップアップ研修Ⅱの対象教員が授業を行う)

2年目(令和2年度)・・・①～③の課題解決に向けて、小学部算数科、中学部国語科・自立活動、高等部自立活動での授業実践

3年目(令和3年度)・・・①～②の課題解決に向けて、中学部国語科・数学科・美術科、高等部国語科・数学科・職業科での授業実践

IV 授業者の気付きから明確になった授業改善のポイント

- ・児童生徒が自分事として取り組みたくなるような内容にするとともに、児童生徒同士で対話したくなるような授業展開を工夫すること
- ・教科固有の見方・考え方を重視しながら、更に生活への汎化を意識すること
- ・この題材での深い学びの姿とは何か、どのような発言や表現ができれば深い学びに到達したと言えるのかを具体的に設定すること
- ・深い学びのためには、児童生徒がどうしたら主体的に取り組むのか、対話を通して思考するのかを考えること



V まとめ(提言)

- 重度重複障がいの児童生徒の対話的な学びでは、「児童生徒の選択の精度を高めるために、『そこにはない』といった否定表現も含め選択肢の幅を増やすこと」「即時性を意識し、選択したことを教員がすぐに実践し、児童生徒にフィードバックすることで、児童生徒自身が自分のしたいことが伝わったと実感できるようにすること」が重要になることから、「児童生徒の表出を見取る力を教師が高めること」が求められる。
- 小学部の学びでは、「取り組みたくなる外発的動機付けを意識しながらも、学習を通してその教科ならではの学びを重視し授業を進めること」「児童同士の活動を通して、思考を言語化し、答えにたどり着こうとする学びにすること」「教科横断的な視点を取り入れ、学んだことが生活に汎化できることを実感させること」が求められる。
- 中学部・高等部の単一障がいクラスの学びでは、「学習の意義を理解することや、自分から考えたいような内容を設定するといった内発的動機付けを意識した授業構築」「既存の知識を活用して問題を解決できるようにするための題材構想の工夫」が求められる。
- 「児童生徒にとっての必要感を重視し、各自の活動を確保する個別化」「障がいの特性を考慮し、1時間の中で解決する問題は一つに絞るといった内容の焦点化」「解き方を教えるのではなく、どうしたら解決できるのかという思考の場面を設けるとともに、思考を補助する支援の具体化」を意識し、児童生徒の深い学びの実現に向けた授業を行い、指導と評価の一体化が実践できるように授業改善をしていくことが求められる。

⇒ 「特別支援学校における主体的・対話的で深い学び実践事例集」(大分県教育センターHP)に実際の取組について掲載